

学 位 論 文 要 旨

研究題目

Efficacy of Intervention for Prevention of Postoperative Delirium after Spine Surgery

(脊椎手術後せん妄予防介入の有効性)

兵庫医科大学大学院医学研究科

医科学専攻 高次神経制御系

整形外科学 (指導教授 橘 俊哉)

氏 名 有住 文博

高齢者の増加や脊椎手術の低侵襲化により高齢者に対する脊椎手術は増加している。術後せん妄は高齢者に見られる合併症の一つであり多くの問題を抱えている。転倒、転落の原因となるほか医療従事者への負担や、入院期間の延長、治療費、死亡率にも悪影響を及ぼすと報告されている。脊椎術後せん妄の報告は散見され、他の整形外科手術より頻度が高いという報告もありその原因は多岐にわたる。今後も高齢者に対する脊椎手術は増えると予想され、術後せん妄の危険因子の同定と予防対策が必要である。本研究の目的は当院における脊椎術後せん妄の頻度と危険因子を調査し、その結果から脊椎術後せん妄スクリーニングツールを開発し、実際に介入を行いその効果を評価することである。2013年から2014年に当院で脊椎手術を行った294例を介入前の前期群(A群)とし危険因子を同定し、スクリーニングツール(Delirium Screening Tool after Spine Surgery: DSTSS)を開発した。2016年から2017年に当院で脊椎手術を行った265例を介入後の後期群(B群)とした。B群はDSTSSを36点満点で術前に評価し低リスク(0-4点)群、中リスク(5-9点)群、高リスク(10点以上)群に分け、介入は中リスク群に看護師による患者へのストレス軽減や眠剤の変更、高リスクではそれに加えて精神科リエゾンチームコンサルトとした。検討項目はA群とB群におけるせん妄発生率と重症度を比較検討した。せん妄の重症度は1)不明言動のみ、2)危険行動、3)ライントラブルに分けて検討した。A群におけるせん妄発生率は22%(64/294例)であった。またロジスティック回帰分析を行った所、危険因子は中枢神経系疾患の既往、ベンゾジアゼピン系睡眠薬の使用、高齢(>70歳)、難聴、ICU入室であった。これらの結果を元にして作成したDSTSSを使用し介入を行った。せん妄発生率はA群22%からB群13%と有意に減少した。B群におけるせん妄発生率は低リスク群0%、中リスク群34%、高リスク群66%であった。せん妄の重症度は危険行動がA群66%からB群40%と有意に減少した。ライントラブルもA群19%からB群9%と減少傾向にあった。せん妄スクリーニングツールの導入によりせん妄の発症は減少し重症度も軽減した。スコアリングシステムがスタッフの術後せん妄に対する意識変化、早期発見・早期予防の一助となりせん妄を抑制することができたと考える。